



こいのぼり

風か、または横風がどのくらいか容易に視認できる。夜間はライトアップされる場合がある。横風は着陸にしばしば危険を及ぼす。もっとも、別途に気象庁などがきちんとした測器で風を観測し、パイロットや管制官にも伝えているが、吹き流しは簡便で確実な道具である。

こいのぼりが遊ぶ五月晴れもそう長くは続かない。西の空からはけで掃いたような真っ白い透明感のある「巻雲」や薄い絹布のような「巻層雲」が広がってくると、低気圧が近づいている証拠である。低気圧の東側に形成される天然のすり台、温暖前線面に沿って暖かい空気が優に5000mを超える上空まで滑昇している、氷点下数十度の世界である。この雲はすべて氷粒で透明感はそのせいだ。雲はいつも「空の顔」を映す。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



日本光機工業(株)提供

「こいのぼり」が五月晴れの青空を、まるで生き物のように体をくねらせながら泳いでいる。風が弱いと垂れるが、強くなるにつれて水平に泳ぐ。先を競っているようだが、胴体や尾は上下左右に揺れても頭は常に風上を向いている。こいのぼり、実は世界中のほとんどの飛行場で滑走路の脇に設置されている。ただし、布製の「吹き流し」で、赤と白で胴巻きされている。一種の風向・風速計である。

飛行機が着陸すべく滑走路に近づくと、パイロットは吹き流しの様子から、向かい風か追い



あかね雲

込む際、高度が数十km辺りに存在する空気分子によって、まず青色が一番強く散乱されるので、空全体が青空に見える。

ところが夕暮れになるほど、太陽光は斜めに差し込むので、昼間に比べて経路が長くなり、途中で青色が減衰してしまい、残りの赤色が下層まで侵入するので夕焼けが現われる。本来は白色に見える雲もあかね色に映える。西の彼方に雨をもたらしている積乱雲などが立ち込めていては夕焼けは現われない。

「夕焼けは晴天のしるし」のことわざには根拠がある。明日にもやって来る西の天気が晴れているからだ。ちなみに月世界で空を仰げば、昼も夜もほとんど真っ暗である。空気がないからである。あかね雲、大気と太陽光が織りなす、ひと時の絵巻である。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



西の空が夕焼けに染まる時、真っ赤に輝く雲がよく見られる。「あかね雲」などと呼ばれる。そんな日の翌日は晴れることが多い。西の空は燃えるような赤みを帯びているのに、上空にはまだ青空が残っている。この違いは、太陽光が大気圏を通過して来る途中、空気分子やちりによる散乱の影響を受けるからである。

太陽光は本来、無色で透明だが、可視光線は波長の短い青から長い赤まで、種々の光の成分で構成されている。プリズムを通して見ると7色に分かれる。太陽光が上空から大気圏に差し